中東・イスラーム研究への期待

岸本美緒

このたび三浦先生から、『お茶の水史学』特集号への寄稿として、「中東・イスラーム研究への期待」というお題をいただきました。ご承知の通り、私は中国史が専門であるため、中東・イスラーム研究といってもその全貌を把握しているわけでもなく、時々勉強させていただいている程度であって、これは正直「無茶振り」というものだと思います。しかし考えてみますと、この三〇数年来日本の中東・イスラーム研究は、他の地域を対象とする国内外の研究者も巻き込んで大規模な比較研究を展開する活動の震源地となってきたのであり、それに巻き込まれて「無茶振り」されることによって視野を広げてきた研究者も多数いることと思います。私もその一人です。

その活動の核となったのは、二つの大型プロジェクト、即ち、一つは略称「イスラムの都市性」（科学研究費補助金・重点領域研究「比較の手法によるイスラムの都市性の総合的研究」代表・板垣雄三、準備期間・取りまとめ期間を入れて一九八七～一九九一年度）、もう一つは略称「イスラーム地域研究」（科学研究費補助金・創成的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究――イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」（代表・佐藤次高、一九九七～二〇〇一年度）で、私の「中東・イスラーム研究」のイメージは、これらのプロジェクトと切り離せないのですが、その後者も今から二〇年前、現在の学生の皆さんが生まれたか生まれないかの昔となってしまったことを考えると、月日のたつのは早いものだという気がします。

私は、「イスラムの都市性」の時から、お誘いをいただいて時々参加していましたが、このプロジェクトは私にとっ

て、印象強烈なものでした。国外及び他分野の研究者も含めて開かれる研究集会の規模の大きさ、ニューズレターや報告集で行われる発信の頻度と国際性、日本各地（温泉地含め）で頻繁に開催される研究会など、どうしたらこんなに精力的に活動が組織できるのかと不思議に思いました。従来も科研の共同研究というものはあったわけですが、それにくらべて万事非常に華やかでダイナミックな印象でありました。数年後の「イスラーム地域研究」のほうも同様のスケールの大きな活動を展開されましたが、私のほうも少し慣れてきたせいか、ただ驚くだけというのではなく、もう少し実質的に貢献しなくてはという気分も次第に生じてきたわけです。その中で最も思い出深いものは、「イスラーム地域研究」のなかの研究班の一つとして、三浦さん、東南アジア専門の文化人類学の関本照夫さん（当時東京大学東洋文化研究所）とご一緒させていただいた「比較史の可能性」の共同研究です。この研究班については、三浦さんもいろいろお書きになっているので、ここでは繰り返しませんが、ご興味のある方は、その成果である論文集『比較史のアジア　所有・契約・市場・公正』（イスラーム地域研究叢書4、東京大学出版会、二〇〇四）をごらんください。

中東・イスラーム研究のこれらのプロジェクトに限らず、私は中国史以外のプロジェクトで比較史的な視野から話をするようにと誘っていただくことが割合多かったのですが、そこでただ中国史の話をして素材を提供するだけというのは、何となく満足できない感じがありました。比較史を標榜する共同研究は多いですが、単に「うちはこれこれです」「お宅はそうなんですか、うちはこうなんです」と手札を見せ合うだけでは、比較史になりませんよね。比較史的に語れと無茶振りされたら、できなくてもやり返す、二倍返しは無理でも二割くらいは相手に斬り込んでいきたいものだ、というふうに思っていました。しかし一方で、自分だけ騒ぎまわるのも気が引けるという遠慮もありました。それに対し、「比較史の可能性」の共同研究は、表面的な異同のレベルにとどまらない「原理的な比較」をめざしており、それは相手の土俵にふみこまないとできないことなので、お互いに蛮勇をふるいあったというわけです。

今、『比較史のアジア』の自分の担当部分を読み返してみますと、背伸びしすぎて破綻しているところも多々あり、そ

の意味では、当時の私が書いた論文のなかでも中国史の内部でそれなりにすっきりまとめたもののほうがずっと気持ちよく読み返せるのですが、まあ比較史というのはそういうものかもしれません。一〇年余り「比較歴史学コース」に籍を置かせていただいて言うのも何ですが、もう退職したので言いますと、比較史というのは、言うは易く行うはなかなか難しいものだと思います。いろいろ頑張って書いてみても、何か未消化なものを書いてしまったという自覚というか、もやもやしたものが残って我ながら釈然としないんですね。ただ、自分の手札を出して事足れりとするのではなく、相手の手札とどこがどう違うのかをきちんと言語化しようとして試行錯誤することは大切だと思います。一つには、自分が中国関係の文章を書いて、「中国は」こうだ、と述べる場合には、暗黙のうちにも何か他のものと比較しているわけなので（「は」という助詞は他のものとの対比を含意する）、漠然と「中国は」というより、何と比較してそうなのかを明示しようと努力するのがフェアというものでしょう。もう一つには、一般的に言って、他分野との対話というのは、消化しきれないもやもや感を伴うのが普通であって、すっきりしすぎた比較というのは、むしろ無自覚なエスノセントリズムに陥る危険がある。そのような対話の難しさに対する耐性というか、粘り強い姿勢を養うという意味でも、比較史にまじめに取り組む（比較史などというのはどうせスローガンに過ぎないのだから適当にあしらっておけばいいや、というのではなくて）ことには、一定の効用があると思います。

そこで、「中東・イスラーム研究への期待」ですが、内容的にこういう研究をしてくださいと他分野の人間がお願いするのは筋違いだと思います。ただ、日本の中東・イスラーム研究の高度成長期（？）に存在した、比較研究にむけての果敢な姿勢を、今後とも持ち続けて、私たちに刺激を与えてくださることを期待する、というのが、今までの経験もふまえて私の申し上げられることだという気がします。ある研究分野が成熟してくると、やはりその分野内部での考証の緻密さを競うということになりがちで、現在の日本の若手中東・イスラーム研究者にもそうした傾向があるのかもしれません。それは大変結構なことですが、同時に、三浦先生のように（といってよろしいでしょうか）、積極的に他分野の研究者に

問題を投げかけ、また他分野からの問いかけに答えてくださる方々が今後も中東・イスラーム研究の分野からたくさん出てくださると嬉しいです。

その際、一つの問題となるのは比較の単位となるまとまりの問題でしょう。「イスラムの都市性」の頃から、これらのプロジェクトを担った方々の間では、オリエンタリズム的なイスラーム社会の一般化（即ち、西洋の立場からイスラームを異質な他者として類型化する）に対する強い批判があったことは明らかです。ただ、オリエンタリズム的でない一般化というのはあり得るのか、というのはよくわかりません。「比較史の可能性」の共同研究でも、特に私の論文などは、「イスラーム世界」「イスラーム法」という形で、かなり乱暴な一般化をしてしまっています。

私の記憶では、「イスラムの都市性」プロジェクトの進行中に、その一つの活動として、イスラーム史の研究者と他分野の研究者とがいくつかのテーマでそれぞれペアを組んで比較の論文集を作るという企画のもと、合宿をしたことがありました（その企画は結局実現しませんでしたが）。そのとき、プロジェクトの総帥の板垣先生がいらして、「イスラームといっても一枚岩ではないのだから、単純な一般化はすべきでない」という意味のことをおっしゃっていて、それに対して私は「それは正論には違いないけれど、他分野の人間に対しそういうことを言われても困るので、どういう単位が適切なのかということは、イスラーム研究者の側が示してくれなくては」と思ったことを覚えています。一般化に対するこうした批判は、羽田正さんの『イスラーム世界の創造』（東京大学出版会、二〇〇五）などを契機としてかなり広がっていて、ナイーブな「比較史」に対する警鐘となっているのではないかと思います。

実は中国史の分野でも同様の事は言えて、「中国」という概念の構築性や「中国」内部の地域的相異といった観点から、「中国」単位の立論を批判する主張は、かなり強いのです。これも正論には違いありませんが、それでは、比較の単位を細分化し、具体的なレベルでの比較を積み重ねてゆけばよいかというと、そうでもないような気がします。実際のあり様は多様であれ、一段メタなレベルでそれらを統合する「中国的」なもの（「原理」というと強すぎるかもしれません

が）を想定することはできるのではないか。荒っぽくてもそのレベルの比較を糸口とすることによって、より緻密な議論へと発展させてゆくことができるのではないか、というのが当面の私の感触です。

今まで様々な刺激を与えてくださったことを感謝しつつ、今後とも、お茶大の、日本の、そして世界の中東・イスラーム研究のますますのご発展をお祈り申し上げます。